

●モノグラフ小学生ナウ



子どもと偏食

vol.3-8



©1983(株)福武書店 教育研究所/加藤智穂
東京学芸大学助教授 深谷和子
千葉大学研究生 庄健二・茨城県守谷町立大井沢小学校教諭 塚本恵美子

目次

特集／偏食の心理	2
調査レポート／子どもと偏食	
要約	6
1. 偏食の実態	8
● 子どもの嫌いなもの	8
● 嫌いなものを出されたら	11
● 偏食をどうとらえているか	12
● 子どもの意見	16
2. 偏食の生み出すもの	18
● 食事の楽しさとの関連で	18
● 偏食と神経質傾向	20
● 偏食とわがまま	22
3. 母親たちの態度	24
● 偏食をどうとらえているか	24
● 母親の態度と子どもへの影響	26
まとめに代えて	27
シリーズ／子ども考現学	
子どもの姿・昔と今(18) 学習塾通い	28
資料1 調査票見本	33
資料2 学年・性別集計表	40

特集

偏食の心理

東京学芸大学助教授 深谷和子



食わないヤツは

いま40、50代のおとなたちの共通の特徴は、一つには偏食しないこと、もう一つはその健康ぶりにあるかもしれない。会議などでお弁当が出されると、どんなにまずくても、きれいに容器をカラにする。日ごろせいたくな暮らしの気配があって、とてもこのような粗末なものは、と思われるような社会的地位のある人たちまでが、まさに「たいらげる」という感じで食事を終える。そのようすを見ていると、戦中戦後の動乱期を、したたかに生きぬいてきた世代の根性をかいま見る感じがする。しかしそれに比べると、若い世代の食べっ

ぶりはどうもいまいち、という感じで気にかかる。先日もある雑誌の編集長と食事をしていたら、「ぼくは食わないヤツは信用しない。しっかり仕事をする人間は、よく食べるものですよ」と彼が言いだした。おそらく毎年若い人たちを採用し、それが一人前の編集者として育っていくプロセスを眺めながら出てきた言葉なのだろう。するとそばにいた若い編集者が「編集長。飢餓世代とぼくたちをいっしょに考えないでくださいよ。食い過ぎればふとるし、腹はこわすし、たくさん食べていいことなんか全然ありませんよ。第一そんなにおれを忘れて食い過ぎるようないまものを、ぼくたちは食べてないんだなあ」と応酬し、「でも、だからあいつは仕事ができない

んだ、などと言われるのもシャクだから、じゃあこっちもいただきますか」とコースで運ばれてきていた冷たくなった「てんぷら」のお皿をひきよせ、大笑いでこの場は終わりになった。むろんその席にいた熟年世代の人びとは、てんぷらを冷たくする間もなく、きれいに食事をすませていたのである。

聡の感覚

よく食べる人間がほんとうによく仕事する人間なのかどうかは別として、私自身は食物に選り好みをする人を見ると、この人はきっと、仕事でも「これは自分にできる」とか、「できない」とか、「向いてる」とか「向いてない」などのごたくを並べる人なんじゃないかと思ってしまう。

だいたい、ふつうの人の食べている食物が、自分だけ食べられないなんて、恥としなければならぬ、という感覚がわれわれ世代にはあるのである。食事だから一応「肉にしますか、うなぎにしますか」とか「魚はどうですか、刺身は」などと聞いてもらえるもの、「この仕事はできますか？ ではこっちは、やる気がしますか」なんて仕事の場で聞いてもらえるはずがないのである。だとすれば、たとえ苦手な食物があっても、「私はうなぎはダメです」などと自分を甘やかしておかずに、苦手なものが苦手でなくなるまでがんばって食べる努力をするべきなのだ。

しかし、この感覚はもう若い世代には通用しないのだろう。なにセクリスタル世代である。若い人びとに言わせると、カップ1つグラス1個でも、自分の好みを大切にして選び、その感覚を大切にして暮らしたいのだそうである。つまり自分の「これはいい。なんとなく自分の気

持ちにピッタリだ」という感覚にこだわる生き方が、大切なのだという。われわれ世代からすると、その大切にする「自分」が、スケールの大きい、成熟した、みごとな存在なら、その自分の「感覚」を大切にして生きるのもいいだろうが、その自分たるや、中途半端で薄っぺらで、どうしようもないしろものだとすれば、その「自分」をもうちょっとましなものにしてから、そのあとで、こだわりなければ、いくらでもこだわればいい、と思ってしまう。こうした感覚もしょせんヤングには通用しないとは思えけれど。

2人の子どもを預かって

そう考えてみると、若い人たちの偏食は、あれで案外彼らなりの自己主張の1つのスタイルなのかもしれない。以前、友人が盲腸炎で入院することになり、小学4年と6年の男の子を1週間わが家で預かったことがある。うちの子どもたちと同じくらいの年齢だから、2人の子どもが4人になったと思って、少々用意する食事の量をふやすくらいでいい、と考えていた私が甘かった。とくに4年の男の子がたいへんな偏食坊やだったのである。

まず朝の食卓。パンと紅茶と、ハムエッグ。「おばさん、この紅茶なあに。日東紅茶？」



と4年の坊や。

私「ううん、これ何だったかな。トワイニングよ。でもどうして？」

彼「うちはね、日東紅茶。日東紅茶がいちばんしぶくなくて、おいしいんだって、ママが言ってたよ」

私「あらごめんなさい。でもこれは、よそからいただいたものでね、ほかに買いおきがないの。飲んでみない。たいして変わらないと思うけど」

彼「ううん、ぼくんちは日東だからね。日東しか飲まない」

たまりかねて、わが家の6年坊主、

「ナオちゃん、飲んでみろよ。トワイニングはイギリス人が飲んでるんだよ。日東紅茶より上等だよ」

それでもナオちゃんは飲もうとしない。わが家の子どもたちなら「じゃおやめなさい」ということになるのだが、大切な人さまのお預かりものだから、敬意を表して、オレンジジュースの登場。

次がトーストを食べる段になって、

彼「おばさん、アプリコットのジャムないの」

私「イチゴジャムじゃダメ？　うちじゃあまりジャムを食べないんだけど、ナオちゃんたちが好きかな、と思ってイチゴジャム買っておいたんだけど」

「イチゴジャムはね、ママの手作りがおいしいんだよ」と今度は6年の坊や。

私「そう、今度ママにごちそうしてもらおうわ。(だんだん腹が立ってくる)だから今日は、このイチゴジャム食べてみて。おいしいわよ」

彼「じゃあ、ぼくいらない」

さてその夜の食卓。子どもならだれでも大好物のはずのハンバーグステーキ。コーンのバターいため添え。サラダ。トマトスープ。

彼「おばさん(やれやれまた始まったか)、マヨネーズないの。マヨネーズちょうだい」

私「あ、サラダね。ドレッシングでお味つ

いてるんだけど、マヨネーズのほうがいいの？」

兄「ナオちゃんは、マヨネーズしか食べないよ。ドレッシングは嫌いなんだ」と解説つき。

私「はい、それじゃマヨネーズね」

彼「おばさん。このとうもろこし」

私「え、何か？」

兄「うちのママはね、かんづめのコーンの時は、おさとうをうんと入れるんだよ。それからおしょうゆもね。ナオちゃんは、甘ジョッパイのが好きなんだ」

私「え？　アマジョッパイ？　ごめんなさいね。これバターでいためたただけだから。じゃ明日はそうしてあげるから、今日はこれでいいでしょ。がまんしてね」

ナオちゃんは、首を振らない。

こんな1週間が過ぎて、へトへトになった私は、それでも表面はニコやかに、坊やたちを退院してきた友人に返したのだが、「何でもよく食べますから」の友人のコトバを思い出しながら、内心は憤懣やるかたないものがあった。自分の家の中でだけしか通用しない行動様式を子どもの身につけさせて、いったいそれが子どもたちのためになるとでも思っているのだろうか。

自己確認のための偏食

しかしあれから十年近くをへた今、このエピソードに関しては、私自身すこし違った見方をするようになってきている。あの坊やたちの極端な偏食またはブランド志向は、実は、それが他人の家に1週間、きょうだいだけで預けられるといういわば一つの危機的状況の下での、彼らのアイデンティティの保持のしかただったのかもしれない。

ママが作ったもの、ママが選んでくれたものを強硬に主張することで、ママの子としての自分、深谷家の子どもではなくて、1人の

立派な「ナオちゃん」としての自分をせいいっぱい主張し、独自の自己を確認しようとしていたのではなかったのか。きっとナオちゃんも、ママの前では、素直にトワイニング紅茶を飲む子だったに違いないと。

とすると、今の若い世代が、うなぎはダメで刺身は苦手。ナマコは気味悪いし、肉はウェルダン。ネギやミツバはくさいし……と偏食のあることをむしろ誇らしげに語るのは、それがアイデンティティの確認の1つの仕方なのかもしれないと思えてくるのだ。「ナマコ？ よくあんな気味の悪いものを食べますね。あれが食べられるなんて、並の神経じゃない。ぼくには耐えられないなあ。でもボクは、ナマコを口に入れられない自分というものを、むしろ大切にしたいと思いますねえ」と彼らは言いたいのかもしれないのである。

日本人はもともと外見が、黒い髪と黒い目に黄色い皮膚、同じ日本語を話す——というような条件もあって、他人と自分の区別がつけにくい、つまり「独自の個」としての自分の確認ができにくい民族と言われる。そこへもってきて最近のように体験の質が、地域によっても家庭によっても、年齢によっても、均質化してくると、ますます自分のアイデンティティが見失われがちになる。そうだとすれば、せめて、うなぎを口に入れられない自分、ナマコを食べる気のしない自分が、他人と違う個性をもった存在として、大切なものと思えてくるのだろう。そう言えば、偏食のある人びとは、どうもそのことをむしろ誇らしげに言い立てている気配もある。なるほど、そうだったのか。先に紹介した編集長の発言も、私は同世代の人間として、拍手して「食わないヤツは信用しない」を受けとめたのだが、若い部下たちにしてみれば、「まあ、恥もなくて、よくそう豚みたいに食えますねえ」と言



いたかったのかもしれない。

おわりに

偏食について、だいぶ同情的な発言をしてきたが、だからといって偏食が望ましい行動であるはずはない。偏食は、ときにその人の人格について、コトバ以上によく物語るものであることを言いたかっただけなのである。

最後に偏食の発生する条件を、かんたんにまとめておこう。

- (1) しつけの失敗、甘やかし。
- (2) その家族の食物摂取のパターンの偏り（何をどのように食べているかという食事文化の問題）。
- (3) 子どもの自己主張の方法。時には注意を引く手段であることもある。
- (4) 性格の偏りの結果。たとえば環境適応力の低さの表れ。

いずれにせよ偏食の子どもに対しては、その意味を確認した上で、必要な教育的配慮がなされるべきだろう。

調査レポート／子どもと偏食

東京学芸大学助教授 深谷和子

千葉大学研究生 庄 健二

茨城県守谷町立大井沢小学校教諭 塚本恵美子

豊かな時代に生まれて、およそ飢えの味を知らないどころか、ひょっとすると空腹の感覚をもたない経験しないまま、成長してきているかもしれない今日の日本の子どもたち。その子どもたちの中にどの程度食物の好き嫌い、いわば食物へのゼイタクぶりが広がってきているだろうか。またそれは、単なるワガママやゼイタクに慣れた、というようなものにとどまらず、その中にもっと大切な性格上

の問題点をも含んでいることも、考えられる。心理学的には、偏食は、人の心理のひずみの表れとしてとらえることも可能なのである。

偏食は今も昔も子どもの中にあつた。むろんわれわれおとなの間にも。本調査は、子どもの偏食のテーマを扱いながら、同時にその背後にあるかもしれない子どもたちの心の問題、つまり性格上の問題点にまで迫ってみようと企図されたものである。

要 約

① 偏食のある子

子ども自身で自分を偏食の多いほう、ととらえているのは約3割。嫌いな食品は圧倒的に、芋やカボチャを除く野菜類である(図2、表1)。



② 子どもの好きな料理



子どもが好きな料理は、カレー、ハンバーグ、ステーキ(焼肉)、スパゲッティ、チャーハンなどのいわゆるスナック料理。逆に嫌われているのは野菜料理のほかは、おふくろの味的な和風料理である(表1)。

3 嫌いな料理が出てきた時

嫌いなものが出てきた時、夕食を例にとると、全然食べない子どもが18%。少し食べる子どもが58%。全部食べる子どもが24%。思ったより子どもは食べようとしている(図5)。



4 母親のしつけ



子どもが嫌いなものに対して、はじめから作らない母親が8%。別のおかずを用意してやる母親が10%。手をつけなくても叱らない母親が17%。あわせて35%の母親には、しつけ上の問題が見いだされる(表2、図9)。

5 食事の楽しさとの関連で

偏食の多い子どもは、偏食のない子どもにくらべて、食事を楽しみにしていないし、食欲もない傾向がある(図15、図16、図18)。



6 性格との関連で



偏食の多い子どもは、偏食のない子どもにくらべて神経質で、性格上に偏りや問題のある傾向が見いだされた(図20、図21、図22)。

●本調査は、vol.3-1「食事マナーの周辺」と同じく、「子どもの行動学研究会」で実施され、第41回の日本教育学会で発表された結果

を、深谷、庄、塚本がまとめたものであることを付記する。

サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	220	162	382
5年	220	168	388
6年	78	59	137
計	518	389	907

調査概要

対象●東京都の小学校4・5・6年生 907名
とその母親 693名
時期●昭和57年5～6月
方法●学校通しによる質問紙調査

1. 偏食の実態



子どもの嫌いなもの

まず図1は、子どもの嫌いなもの（料理でなくて食品）の数である。これは調査票にあるように、子どもが具体的に挙げた食品の数なので、「とっさに頭に浮かんだもの」という理解のしかたをする必要があるだろう。

図が示すように、1個以上食品名を挙げた子どもは77%。5個以上にも及ぶ子どもも15%いる。性別との関連では、女子のほうが、偏食の傾向が強い。

また図2は、「友だちと比べて、偏食の多いほうか」とたずねた結果である。とても多いと答えている子どもが1割弱。わりと多いを含めると3割の子どもが、自分の偏食についての自覚をもっていることになる。これは図1の結果ともほぼ対応している数字である。さてその偏食の内容だが、表1に、上から

20番目までを掲げた。一見して目につくのは、とにかく野菜類が徹底して嫌われている点だ。まるで八百屋の店先のように、1位から17位まで、あらゆる野菜が並んでいる。このリストに出てこない野菜は、芋類とカボチャくらいだ。なぜこんなにも野菜類が目の敵にされるのだろうか。

その隣りは、ついでに嫌いな料理と好きな料理を聞いてみた結果だ。「好きな料理」上位は、カレー、ハンバーグ、ステーキ（焼き肉を含む）、スパゲッティ等々、「やっぱり出ましたスナック料理」という感じで、中年もしくは熟年のおとなたちには、およそ食欲をそそらないものばかり。逆に「嫌いな料理」となると、1位2位の野菜料理は別として、3位以下は、いわゆる「おふくろの味」がずら

りと並ぶ。これでは世の母親たちが、夕食の献立に苦勞するのが目に見えるようだ。いったい実際には、父親と子どもの好みのどれを生かしたメニューになっているのだろう。

もう一つ別の角度から偏食を見てみよう。

図3は、食品そのものの好き嫌いと言うよりも、食べにくいものを食べられるか、いわば食物に対する神経質傾向を見たものだ。いずれも気持ちが悪いもの、食べにくいもの、食べるのに抵抗のあるものに対する態度を見ようとしている。

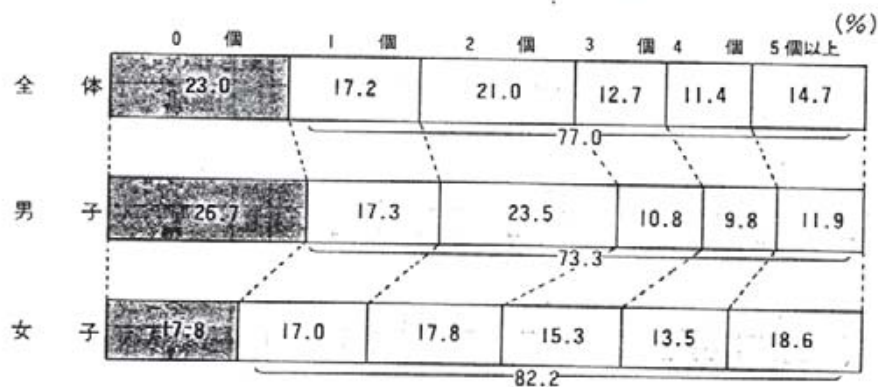
たとえば「生玉子を飲む」だが、平気なのはわりとも含めて46%。5割強の子どもが「食べられない(たぶん・全然を含めて)」と答えている。昔の親は、ここぞという時に、「生玉子を飲んで行きなさい。精がつくから」と言

ったものだ。生玉子をお茶碗に割って、しょうゆをポタポタ。それが「めったにない時」を暗示して、試験日の朝などに子ども心をふるいたせたものだった。それもはや昔語り。いまは、スポーツドリンクの時代なのだろう。

次は、とり皮と目ザシを丸ごと食べる、が同じくらいの割合で、やはり敬遠されている。4割近くの子どものが、たぶん(全然)食べられないだろうと答えている。

子どもがよくするリンゴの丸かじりは別として、ここにもある種の偏食が見いだされる「食べ易く、見た目や感触のいいものしか食べない」という、新しいタイプの偏食の出現と言えそうだ。

図1・子どもの嫌いな食べものの数



* 料理は含まない

図2・好き嫌いが多いほうか

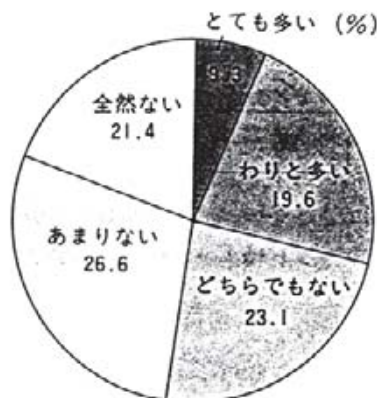


表1・子どもの嫌いなもの・好きなもの

	① 嫌いな食品	② 嫌いな料理	③ 好きな料理
1	ビーマン	野菜サラダ	カレー
2	にんじん	野菜いため	ハンバーグ
3	しいたけ	煮魚	ステーキ *焼き肉も含む
4	ねぎ	おさしみ	スパゲッティ
5	アスパラガス	つけもの	チャーハン
6	トマト	すのもの	かつどん
7	ニラ	天ぷら	天どん
8	ブロッコリー	カキフライ	ぎょうざ
9	なす	煮物	すし
10	ラッキョウ	トンカツ	とりのからあげ
11	セロリ	うどん	親子どん
12	パセリ	やきそば	うなぎ *うなどんうな重
13	玉ねぎ	すぶた	焼魚
14	グリーンピース	とろろ	野菜いため
15	きのこ類 *なめこしめじ	おかから	みそ汁
16	キャベツ	おひたし	はるまき
17	レタス	しおかから	煮物
18	魚貝類	おかゆ	五目ごはん
19	レバー	シチュー	サラダ
20	チーズ	親子どん	ラーメン

図3・次のものを食べられるか

	ぜんぜん平気	わりと平気	たぶん食べられない	ぜんぜん食べられない	(%)
○ 生玉子をのむ	21.3	24.4	26.8	27.5	
○ とりの皮を食べる	34.9	27.6	24.6	12.9	
○ メザシなどの頭や尾を食べる	34.6	25.3	24.0	16.1	
○ 小骨の多い魚を食べる	35.3	39.3	19.5	5.9	
○ 皮つきのリンゴをかじる	72.1		22.1		3.6 2.2
○ 食べたことのないものを食べる	19.8	42.4	31.2	6.6	

嫌いなものを出されたら

しかし考えてみると、友人に好き嫌いがあるように、食物にも多少の好き嫌いがあるのは、当然かもしれない。問題は、それを、いわばおおよけの場で出された時に、食べられるかどうかではないだろうか。この場合のおおよけとは、私的でないという意味だ。たとえば、1人でテレビを見ながら、自分で作って食べる食事の場合、これは何をどのように食べようが、全くその人の好みの問題として片づけることができる。しかし食事は、多くの場合、他人との接点の上に位置している。他人が自分に作ってくれたり、もてなそうとか、一緒に楽しもうとする配慮の下に置かれることが多い。つまり食べないことが、何らかの意味で人間関係を損なうことになり易い。とすれば、そうした場で、偏食を示すことは、やはりその人の適応性の問題として、意味をもってくるだろう。

さて図4は、夕食や給食に、嫌いな食物が出てくるかどうかである。「ぜんぜん出ない

(偏食がないか、あっても食卓には上らないような種類のものの場合だろう)」のは2割弱に過ぎず、他は多少とも嫌いな食物と日ごろ対面をさせられている。

さてその時子どもたちはどうするか。図5に掲げたように、給食で86%、夕食で82%の子どもが、少しなりとも食べようと努力している。とくに給食のほうが、「ぜんぜん食べない」子どもの割合は低い。つまりある種の偏食は、子どものワガママからのもので、努力して食べれば食べられるものであることが示されている。また「全部食べる」がんばり屋も夕食で24%、給食で31%もいることに、注意しよう。

さらに巻末の集計表を見ると、「ぜんぜん食べない」のは男子21%、女子15%で、男子に多く、また学年との関連では、4年20%、5年18%、6年16%と、学年を追って食べない子どもが減っていく。つまり適応の幅が広がっていくようすが見いだされる。

図4・嫌いなものは食事に出てくるか

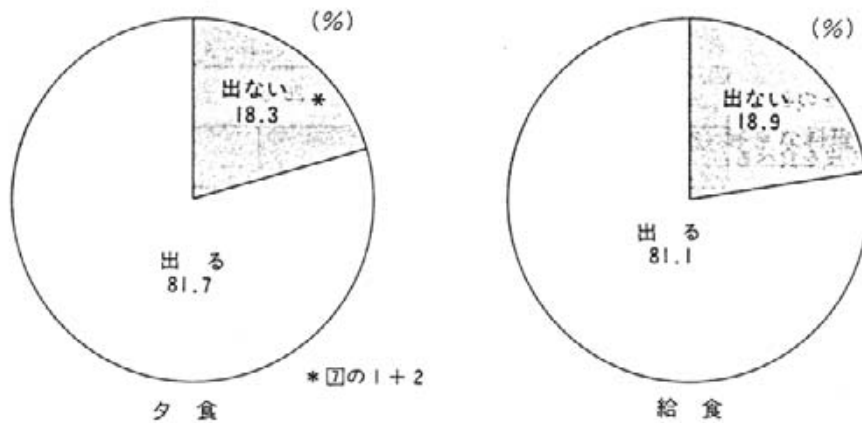
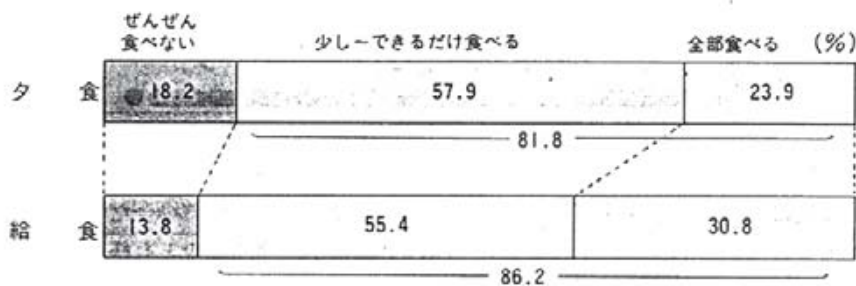


図5・嫌いなものが出てきた時どうするか



偏食をどうとらえているか

さてその偏食を、子ども自身はどうとらえているのだろうか。おとながよく言うように偏食をわるいことと考えているのだろうか。

まず図6は、嫌いなものたくさんある子(偏食の多い子)についてのイメージをたずねた結果だ。偏食の多い子についてのイメージは、「わがまま(69%)」で、「甘やかされている(58%)」。その結果、「からだが弱い(53%)」と、子どもの評価はさんざんだ。ただし、ややくろうとっばい見方というか、図の下部に掲げたような、子どものパーソナリティーとの関わりでの把握は、あまりできていない。もっともこれは、望むほうが少し無理である

かもしれない。そして図7に掲げたように、そうした見方は、6年生になると急にすずむようすも見られる。

偏食がこうした「わがまま」の表れならば、偏食の多い人間は、子どもの目から見て、「ある感心できない傾向をもつ存在」として把握されているとも考えられる。では、子どもの周囲のおとなたちは、この点に関して子どもたちにどうとらえられているのだろうか。

図8を見よう。まず母親についてだが、「何が好きで何が嫌いかわかりにくい」母親が34%。「何でも食べるから、たぶん偏食はなさそうだ」と思われている母親が39%。

残った28%が「偏食があるようだ」と把握されている母親ということになる。ただし、その中でも、「嫌いだと食べない」母親は10%。つまり10人に9人は、偏食がないか、あっても子どもの目にははっきりしないぐらいに上手に対応していることがわかる。

図8の下部は担任についての観察である。「知らない」が48%と、母親よりさすがにふえる。ここでも「食べない」担任は12%と、ほぼ母親と同じぐらいの割合になっている。こうした偏食を子どもの前に表出したほうがよいのかわるいのか。教育的観点から議論の分かれるところだろう。

さて、母親たちの偏食をめぐる「しつけ」はどうなっているのだろうか。

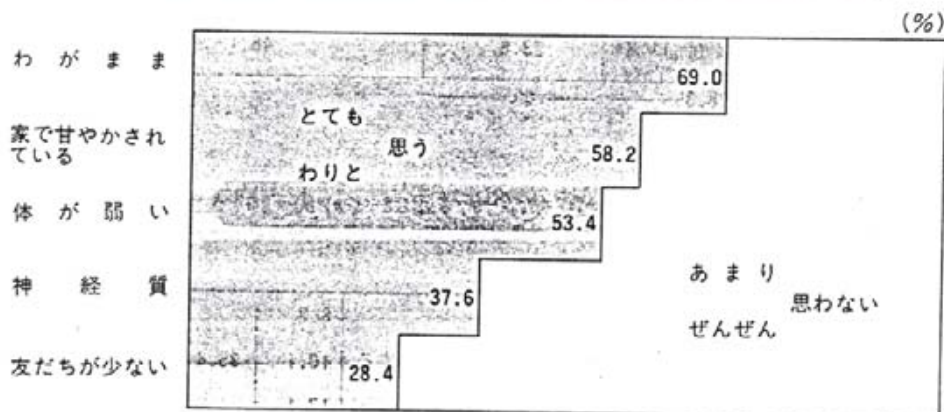
表2はそのしつけのパターンを見たものだ。図9に示したように、大きくわけて、偏食許容派35%、中庸派（少し食べれば許してくれる）49%、強硬派（全部食べなければ許して

くれない）16%との割合だ。昔に比べると、偏食をめぐるしつけは、非常にゆるやかになってきていることがわかる。このへんについても、しつけのあるべき姿について、論議がされる必要があるだろう。

次に図10は、周囲の子どもたちの目の受けとめ方だ。これはある意味で、偏食の是非について、他人の目を借りた子どもたちのホンネの意見、とでも言うべき数字かもしれない。

全体として、5割の子どもは「残したって、友だちは何とも思わないだろう」と見ており、「食べればいいのに」は4割。「偏食のある子はちょっとヘンと思われても仕方がない」という感じをもつ子どもは1割弱でしかない。しかも「何とも思わないだろう」は、学年を追うにつれて増えていく。4年で46%、5年で53%、6年で58%。男子と女子では、男子のほうが、「残したってどうってことはない」と感じている。

図6・嫌いな食べものたくさんある子に対するイメージ*



* 嫌いな食べものたくさんある子は何でも食べる子と比べてどんな子どもだと思いますか。

図7・嫌いな食べものたくさんある子のイメージ(学年別)

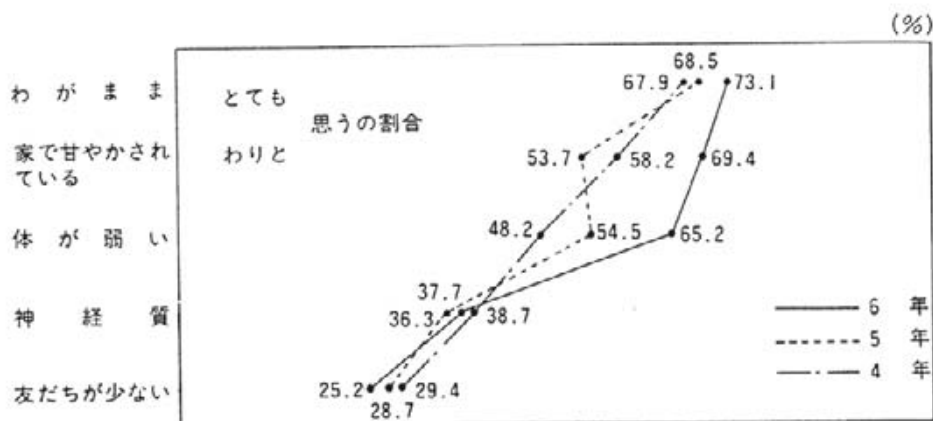


図8・あなたのおかあさんや担任には嫌いな食べものがあるか

	食事に出さない		何でも食べる	知らない (%)
	ムリして食べる	食べない		
母親	11.4	6.5	38.9	33.6
担任	11.8	4.9	23.6	48.1

注: 母親の「ムリして食べる」(11.4%)と「食べない」(6.5%)を合計すると27.5%ある。担任の「ムリして食べる」(11.8%)と「食べない」(4.9%)を合計すると16.7%ある。

表2・子どもからみた母親のしつけ

(%)

1. はじめから作らない	8.2	} 35.4
2. あなたの分だけ他のおかずを用意する	10.1	
3. 一口も食べなくてもしからない	17.1	
4. 半分くらい食べればゆるしてくれる	38.8	} 48.5
5. 一口食べればゆるしてくれる	9.7	
6. 全部食べなければゆるしてくれない	16.1	

図9・母親のタイプ(偏食のしつけをめぐって)

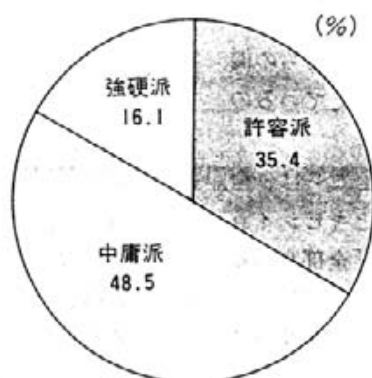
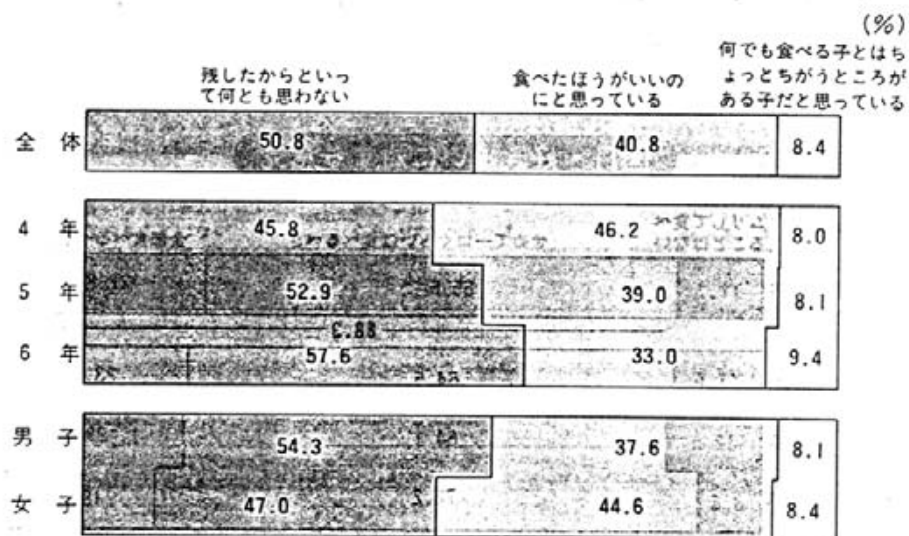


図10・あなたが嫌いなものを残すとまわりの子はあなたをどんなふうに思うか



子どもの意見

さてこのへんで、子どもたちに、偏食についての発言の機会を与えよう。自分たちの偏食について、彼らはそれをどう考えているのか。

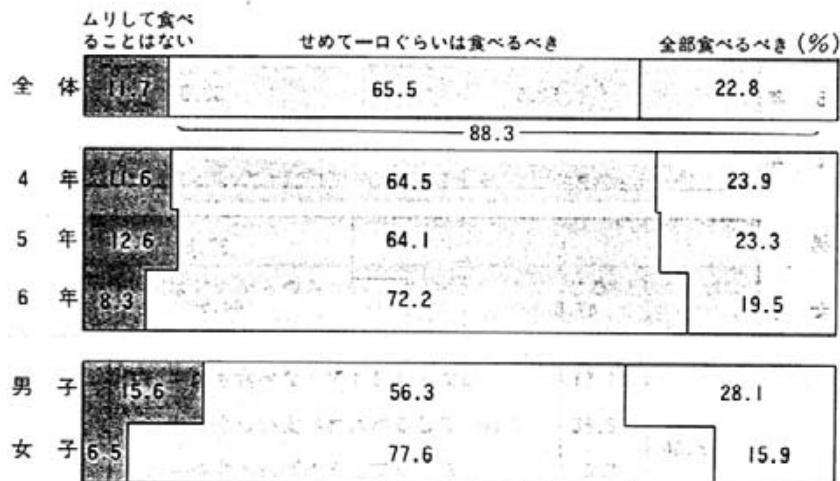
図11に明らかなように、子どもたちは、全体としては偏食に対して、わりとキビシイ意見を持っている。建前にせよ、「全部食べるべきだ」が23%。「せめて一口は」が66%。あわせて9割近くの子どもが、偏食を認めていない。

また、学年を追って、偏食許容派は減っていく。「ムリして食べることはない」は、4年で12%、5年で13%とあまり変わらないが、6年になると8%へと減少する。少しずつおとなの判断に近づいていくようすがわかる。

また男子と女子では、やはりここでも男子のほうが「ムリして食べることはない」と型にはめられるのを拒否する傾向が見られるのはおもしろい。

また図12は、図11で見た「意見」と子どもの実際の行動との関連を示したものだ。○印をつけた最大値が示すように、意見と実際の行動は、かなり一致している。「ムリして食べることはない」と思っている子どもで、嫌いなものが出てきた時に「全然食べない」子どもは45%もいるのに、「せめて一口ぐらゐは」の意見のグループではそれが17%に減り、「全部食べるべき」派ではわずか7%に減っている。もっとも意見が人の行動を規定するのか、それとも行動によって意見が作られるのか、議

図11・好き嫌いに対する意見



論の分かれるところではあろうが。

さてもう一つ。図13は、母親や担任のこうした意見についての、子どもの推測である。

これでおもしろいのは、「ムリしても全部食べるべき」とするタカ派的意見の持ち主は、母親では27%。ところが担任はそれを上回って、32%。母親のしつけの不足のツケが教師

に回されて、教師が悪戦苦闘する状況がよく話題に上るが、この数字もややその姿を写し出している気配がある。また先の図10の子どもの結果と比べてみると、全体の傾向はほぼ似ているが、やはり子どもがいちばん偏食に許容的で、ついで母親、最後に担任、という順が見いだされる。

図12・子どもの好き嫌いに対する意見×嫌いなものに対する対応のしかた

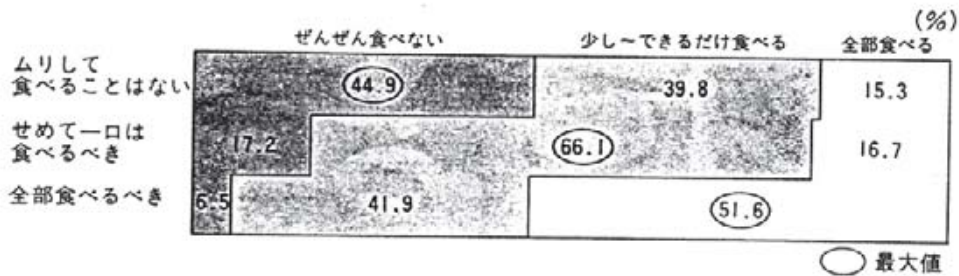


図13・嫌いな食べものを食べないことについての母親や担任の意見(子どもの推測)

	嫌いなものをムリして食べることはない	嫌いなものでも一口ぐらいは食べるべき	ムリして全部食べるべき (%)
母親	8.0	65.4	26.6
担任	7.6	60.0	32.4

2. 偏食の生み出すもの



偏食がなぜわるいのか、という疑問を持っている人は多い。栄養学的に代替が可能なら、それでいいではないか。というのも、たしかに一つの理屈である。ただしこのレポートでは、栄養学の観点ではなく、ある意味で偏食を性格上の問題や一つの環境適応の失敗としてとらえようとしている。しかし、果たしてそうしたとらえ方が正しいものなのか。以下データを検討していこう。

食事の楽しさとの関連で

まず図14は、夕食と給食の楽しさを見たものだ。夕食も給食も7割を越える子どもたちから、楽しいという評価を得ている。ところが、わずかだが、「あまり・全然楽しくない」子どももいる。なぜだろう。図15は、夕食の楽しさと、子どもの偏食の有無との関連を見たものだ。図が示すように、偏食のない子どもは、64%が夕食をととても楽しいと言っているが、多少とも偏食のある子どもで夕食の楽

しい子どもは、40%を割っている。このことは図16の給食の場合も同様だ。偏食のある子どもは、何らかの理由で食卓が楽しくないことがわかる。その理由の検討は後にゆずるとして、図17、図18を見てみよう。給食の時に お代わりをするか、と偏食との関連では、明らかに偏食の多い子どもは食欲を示さず、偏食のない子どもは、よく食べている結果がある。

図14・食事の楽しさ

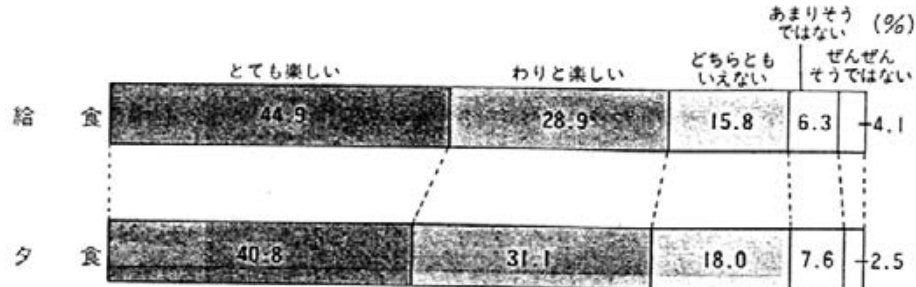


図15・好き嫌いの程度×夕食の楽しさ

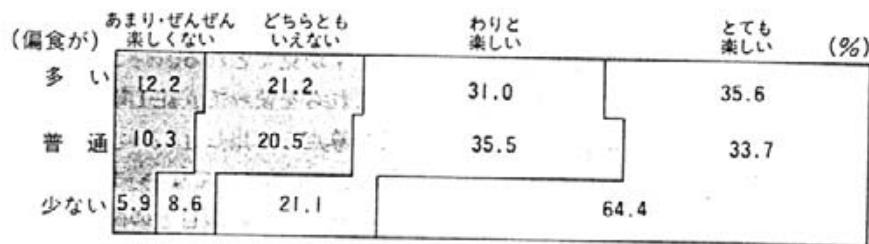


図16・好き嫌いの程度×給食の楽しさ

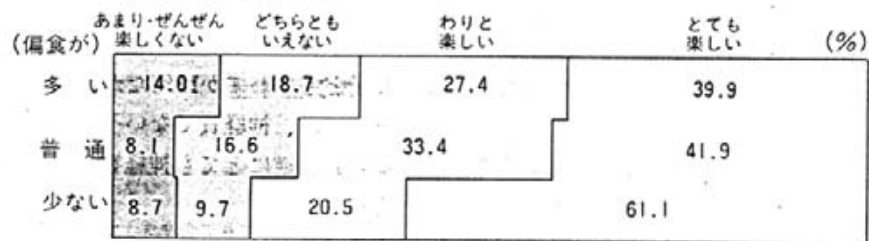


図17・給食の時にかわりをするか

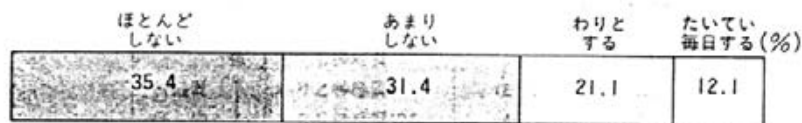


図18・好き嫌いの程度×給食の時にかわりをするか

(偏食が)	(%)			
	ほとんど かわりしない	あまり かわりしない	わりと かわりする	たいてい毎日 かわりする
多い	42.2	33.1	17.5	7.2
普通	36.1	32.2	21.9	9.8
少ない	26.0	25.0	24.5	24.5

偏食と神経質傾向

偏食の多い子どもが、なぜ食卓についても食欲を示さないか、なぜ食事の時間が楽しめないのか。偏食があると言っても、それが毎回食卓に上るわけではないのだから、嫌いなもののせいで、食事が楽しくないのだとは、考えられないのである。

その一つの背景を、子どもたちの性格上の問題の中に探ってみよう。性格のとらえ方は種々あるが、ここでは「神経質傾向」の側面をとりあげてみる。神経質とは、刺激に対する反応の過敏性を意味する。ふつうであったら反応を引き起こさない程度の、何ということない刺激が、大きな反応を引き起こす。つまり適応力のとぼしい性格の一面と言ってもよさそうだ。

ここではそうした傾向を、①食物に対する神経質傾向と、②生活面での神経質傾向、の二つの側面から見ていくことにしよう。

まず食物に対する神経質傾向は、すでに図3に掲げておいたが、「生玉子を飲む」「ブツブツしたとり皮を食べる」など、6項目にわたっている。また生活面での神経質傾向を見る項目と結果は、図19に掲げた。いずれも、反応過敏性を思わせる子どもから、むしろ刺

激にはドン感なタイプまで、個人差が大きいようすが見てとれる。

これらを使って、注1に示したような方法で加算点を算出し、「きわめて神経質」から、「ぜんぜん神経質でない」まで4段階に区切って、それと他の項目との関連とを見ることにした。

まず図20は、偏食と神経質傾向との関連を見たものだ。図が示すように、2つの神経質傾向とも、偏食と大きなかわりがある。たとえば、食物に対する神経質傾向では、偏食のないグループには、「ぜんぜん神経質でない」子どもが42%もいて、「とても神経質」な子どもはわずか12%だが、偏食の多いグループでは、神経質でない子どもが13%しかいないし、逆にとても神経質な子どもは30%にも達する。

このことは、生活面での神経質傾向においても同様に見いだされる。

以上のように、偏食の多い子どもは、食事以外の場においても、問題の傾向を示し、それが食事行動においてその一端を表しているとも見てもよさそうである。

図19・生活面での神経質傾向

	とてもそう	少しはそう	あまりそうでない	ぜんぜんそうでない (%)
1. 食事の前にはきれいに手を洗わないと気持ちが悪い	33.0	34.4	18.4	14.2
2. 自分の部屋などはきちんとかたづいていないと落ち着かない	20.0	26.6	28.1	25.3
3. 昼にいやなことがあると夜はなかなか寝つかれない	13.3	25.6	26.9	34.2
4. 明日何を持って行ったらよいかを友だちにたびたび確かめないと心配だ	11.8	28.7	29.2	30.3
5. ちょっとした物音で目を覚ます	10.7	15.3	27.5	47.1

(注1)

食べ物に対する神経質傾向加算点の算出方法

	ぜんぜん平気で食べられる	わりと平気で食べられる	たぶん食べられない	ぜんぜん食べられない
1. 生たまごをむ	1点	2点	3点	4点
2. ふつふつしたとり肉の皮を食べる				
3. ししゃもやめざしの頭やしっぽを食べる				
4. 小さな骨の多い魚(の骨をとりながら)食べる				
5. 皮をむいてないリンゴをかじる				
6. 今までに食べたことのないものでも平気で食べられる				

6項目の得点を加算する

		得点	比率
神経質傾向	強	16~24点	20.3
	↑	わりと神経質	13~15
	↓	あまり神経質でない	10~12
	弱	ぜんぜん神経質でない	6~9

生活面での神経質傾向加算点の算出方法

	とてもそうだ	少しはそうだ	あまりそうでない	ぜんぜんそうでない
1. 昼にいやなことがあると夜はなかなか寝つかれない	1点	2点	3点	4点
2. ちょっとした物音で目を覚ます				
3. 自分の部屋などはきちんとかたづいていないと落ち着かない				
4. 食事の前には、きれいに手を洗わないと気持ちが悪い				
5. 明日何を持って行ったらよいかを友だちにたびたび確かめないと心配だ				

5項目の得点を加算する

		得点	比率
神経質傾向	強	5~11点	30.0
	↑	わりと神経質	12~13
	↓	あまり神経質でない	14~15
	弱	ぜんぜん神経質でない	16~20

図20・偏食×神経質傾向

① 食べものに対する神経質傾向

(偏食が)	(%)			
	とても神経質	わりと神経質	あまり神経質でない	ぜんぜん神経質でない
多い	30.0	33.4	24.1	12.5
普通	17.5	31.1	30.5	20.9
少ない	12.1	16.3	29.5	42.1

② 生活面での神経質傾向

(偏食が)	(%)			
	とても神経質	わりと神経質	あまり神経質でない	ぜんぜん神経質でない
多い	33.2	22.3	23.8	20.7
普通	31.8	27.0	20.6	20.6
少ない	22.3	16.5	19.1	42.1

偏食とわがまま

偏食とは、他人がふつうに食べているものを、食べられないことだ。すなわち食物に対する適応能力が低いことである。とすれば、適応性の狭さは、食物に限らず、他の性格的側面にも表れているはずだ。そうした観点から、図21に掲げたような側面に焦点をあててみることにした。1つは「好きな科目はやるが、嫌いな科目はやらない」という、いわば

イヤなことに対する耐性の低さ、もう1つは「いそがしい係や委員にはならない」という自分勝手な傾向である。これは、好きなものは食べるが、嫌いなものをガマンして食べる態度がない、すなわち偏食ともかなりの共通点をもつ態度と思われる。

図22に掲げた結果を見ると、偏食とこれらの性格上の問題点には、やはり両方ともかな

図21・子どもの性格上の問題

① 好きな教科はいっしょうけんめい勉強するが嫌いな教科はあまり勉強しない (%)

とてもそう	わりとそう	どちらともいえない	あまりそうではない	ぜんぜんそうではない
15.6	20.3	30.3	22.1	12.0

② いそがしくてたいへんな係や委員にはなるべくならない (%)

とてもそう	わりとそう	どちらともいえない	あまりそうではない	ぜんぜんそうではない
16.8	21.6	24.9	19.3	17.4

りの関連性をもっていることがわかる。たとえば、偏食の少ない子どもの中には、「好きな教科だけ勉強するようなことはない」子どもは40%もいるが、偏食の多い子どもだとこれが27%に低下する。また忙しい係にならな

いエゴイスティックな態度の持ち主は、偏食の多い子どもの中に49%もいるが、偏食の少ない子どもの中には、35%しかいない。

以上見てきたように、偏食と子どもの性格との間には、かなりの関連がありそうである。

図22・偏食×性格

① 好きな教科だけ勉強する

(偏食が)	(%)		
	とてもわりと そう	どちらも 言えない	あまり・ぜんぜん そうではない
多い	44.7	28.4	26.9
普通	29.5	34.3	36.6
少ない	37.0	23.5	39.5

② いそがしい係や委員にならない

(偏食が)	(%)		
	とてもわりと そう	どちらも 言えない	あまり・ぜんぜん そうではない
多い	49.4	23.1	27.5
普通	33.1	27.8	39.1
少ない	34.5	20.4	45.1

3. 母親たちの態度



以上、偏食をめぐる子ども調査のデータを見てきたわけだが、本調査の場合、さらに子どもたちの母親(693名)に対して、子どもと同じ質問項目を使って、親と子どもの態度の関連を見てみたので、この点のデータを2,3つけ加えておくとしよう。

偏食をどうとらえているか

まず図23は、偏食に対する母親たちの意見である。図に示したように、「偏食があってもよい」とする母親はわずか1%。「少くならぬならかまわない」をあわせても、偏食を許容する者は2割に過ぎない。

そして図24に掲げたように偏食児に対するイメージも、子どもの場合よりさらに悪い。とくに神経質傾向を指摘する母親は、63%にも上っている。

それほど偏食を問題視している母親たちならば、実際に子どもの偏食に対してどうしつ

けているのだろうか。すでに図1で見たように、ちょっと思い浮かべただけで1つ以上の嫌いな食品が出てくる子どもは8割もいるし、また日常場面では、もっと多くの嫌いな食物に出逢っているはずだが、それらの一つひとつに、母親はどう対応しているのだろうか。

図25にそのしつけの方法を掲げたが、母親たちがしているのは「栄養があるから」などの説得と、「調理法を工夫して食べさせる」が大部分で、叱るなどのきびしいしつけは、ほとんどされていないようすである。最近の

母親たちがしつけに手を抜いているとか、他力本願だと言われることも多いが、ここでも

偏食に対する問題意識が強いわりには、どうもそのしつけの実際に迫力がない感じである。

図23・偏食に対する母親の意見(母親調査より)

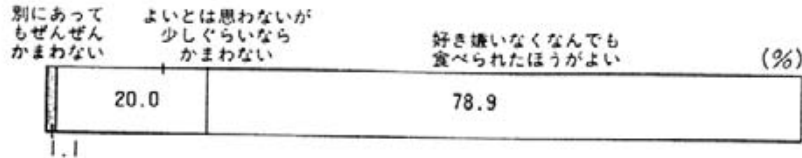


図24・偏食児に対するイメージ(母親調査より)

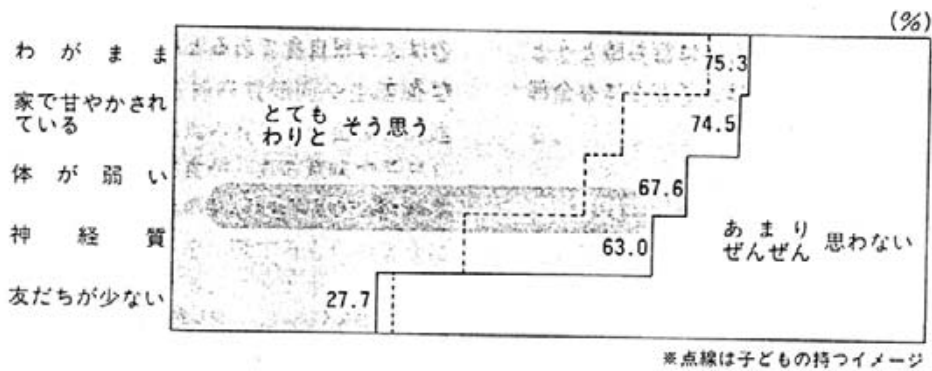
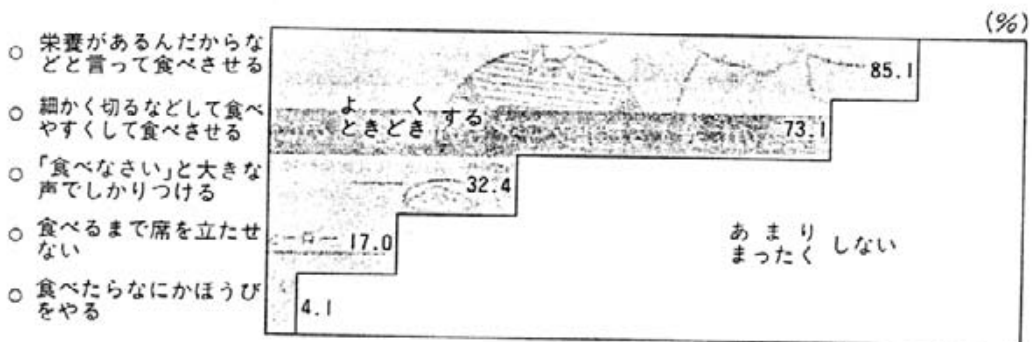


図25・偏食に対する母親の行動(母親調査より)



母親の態度と子どもへの影響

母親に偏食が多いと、子どももその影響を受けて偏食が多くなるのは、日常よく見聞される。これをよく表しているのが図26である。嫌いな食物に対する母親の反応の仕方はさまざまだが、そのうち、子どもの前でも嫌いなものは食べないグループと、嫌いでも全部食べるグループをぬき出して、子どもへのしつけを見てみた。

図が示すように、母親がガンコな偏食だと、子どもの嫌いなものは、できるだけ食卓にのせないか、または1口も食べなくとも叱らない。しかし母親が嫌いなものに打ち勝とうと努力しているグループでは、子どもにも全部

食べることを要求する。甲羅に似せて穴を掘るとは、よく言ったものである。

また図27は、母子の態度の関係だ。図が示すように、嫌いなものははじめから食卓にのせなかったり、子どもの前でも嫌いなものは食べない、といった問題のある母親の子どもは、やはり嫌いなものは1口も食べない、という態度を示す子どもが多く、逆に偏食のない母親の子どもは、やはり嫌いなものでも全部食べる行動の仕方が身につけている子どもが多い。そうした意味で、偏食児を作っているのは、母親自身であるということも、言えるだろう。

図26・母親の偏食×子どもへのしつけ

	(%)			
	食卓に出さない	一口も食べなくても叱らない	少し食べれば許してくれる	全部食べなければ許さない
嫌いなものは1口も食べない	29.5	39.4	25.0	6.1
嫌いなものでも全部食べる	11.6	7.8	32.3	48.3

図27・母親の嫌いなものに対する態度×子どもの嫌いなものに対する対応のしかた

	(%)		
	子どもへの態度 一口も食べない	一口少し残す	全部食べる
なるべく食卓に出さない	34.0	58.9	7.1
子どもの前でも食べない	27.6	51.3	21.1
ムリして食べている	17.7	59.4	22.9
嫌いなものはぜんぜんない	12.4	56.5	31.1

まとめに代えて

調査の結果明らかになったことは、子どものパーソナリティと偏食傾向との間に、かなりの関連が見いだされたことである。

一般に偏食は、主として母親のしつけの失敗(甘やかし)や、その家庭の食習慣上の問題(ある食品を好んで食べる。逆にある食品は、ほとんど食卓に上らない)からくるものと考えられがちだ。むしろそうした側面もあることは、今回のデータの中にも表れている。しかし、食物に対する神経質傾向や生活面での神経質傾向と、偏食の有無とが密接な関連を示したことは、偏食が、ある意味で子どもの性格や環境適応上の問題の存在を示す、一つの信号であることを示唆するものように思う。また、偏食の多い子どもが、夕食や給食の時に食欲を示さなかったり、食卓の雰囲気を楽しみと感じなかったりしている点も、やはり子どもの生活上に何らかの問題点があ

ることを示す信号として、偏食を理解する必要性を暗示するものように思う。

したがって、偏食が、子ども自身やその環境に問題のあることを示す信号であるならば、偏食の多い子どもを、栄養学的に代替が可能だから、とか、成長すればなくなっていこうから、と放置せず、信号の背景にある問題点に対して、十分な教育的接近がはかれることが大切だということになるだろう。この信号を見落とさないようにしたいものである。



子どもの姿・昔と今 (18)

学習塾通い

放送大学教授 深谷昌志

通塾現象の慢性化

文部省が、全国規模の学習塾調査を実施したのは、昭和51年であった。乱塾時代という言葉が流行するほど、学習塾通いをする子どもが増え、そうした傾向が子どもの生活にひずみを与えている。国として、それなりの対策を立てる必要がある。そのために、まず、全国調査を行い、実態を明らかにしたい。そうした趣旨に基づいての調査であった。

念のために、この時の調査結果の概要を紹介すると、

- ① 小学4年生の通塾率は12%、小5 = 19%、小6 = 27%である。
- ② 小6の場合、大都市の通塾率33%、地方都市25%、町17%、村6%である。
- ③ 国語と算数の2教科を週2回習って、



月謝が6千円が標準的なスタイルである。

の通りであった。この前後、文部省に刺激されてか、各県でも、塾通いの実態調査を行っている。

しかし、実態調査は実施したものの、塾通いが家庭教育の領域に属するだけに、通塾率を低下させるための有効な手段を見いだせぬままに、時間が経過していった。その間、校内暴力や家庭内暴力といった、より深刻な教育問題が発生するにいたって、塾通いに対する関心は薄れつつある。

社会的な関心が薄れたといっても、それは通塾率が低下したわけではない。

昭和58年6月、NHKが塾通いの特集を放送することになり、調査票作りの手伝いをした。大阪近郊の小学6年生800名を対象とした調査だが、通塾率は、予想を上回る70%であった。こうした調査の場合、サンプル誤差がつきものであるから、この結果だけから、「7割通塾の時代」というのは誇張にすぎよう。事実、同じ大阪地方でも、昭和57年11月に、筆者が実施した枚方市の調査(小学高学年生1千名)では、通塾率が4割にとどまっている。

そうはいうものの、昭和51年当時より通塾率が高まっているのは否定しがたい。大都市近郊の調査では、NHKの調査ほどでなくとも、塾通いが6割を超える結果はめずらしくない。それと同時に、都市圏では、学習塾の巨大化が目につく。退職した女教師が自宅の一室を使い、数人の子どもを教えるというような文字通りの塾は姿を消しつつある。それに代わって、ターミナルのビルを校舎に使い、専用のテキストや教材を用意し、入学試験を

実施して、子どもたちを学力に応じたクラスへ編入する、そして、定期テストをくり返し、偏差値を参考にして、クラス替えを行うという形の学校化した学習塾の主流を占めつつある。

こうした学習塾では、テストの結果がなによりも尊重され、いわゆる一流の私立中学合格がもっとも価値を持つかのように説かれている。そのため、子どもたちの中に、成績の良し悪しに極端なまでにこだわりを持つ態度が育ちやすい。

塾通いが慢性化しているだけに、通塾現象に慣れを感じやすい。しかし、小学高学年生の半数近くが放課後塾通いをする姿は、どう考えても正常といいがたい気がする。

学校と学習塾との二元構造

こうした学習塾の姿を学校のあり方と対比させてとらえると、奇妙な感じがしてくる。なぜなら、現代の学校は学力差をあらわにしない文化を特色とする。具体例をあげるなら、第二次大戦まで、小学校では成績がトップの子どもが級長に任命され、学級を統轄するのが常であったし、卒業式に、学年の席次第1位の子どもが総代となって答辞を読む形が定着していた。もともと、通知票に席次がつけられていたのは、別の項でふれた通りである。

そうした学力差をあらわにする学校文化は、第二次大戦後、急速に姿を消した。そして、級長制が学級委員制へ、総代にかわって学級を単位とした卒業式へ、さらに、席次のついた通知票は、相対評価、そして、到達度評価へ形をかえて、現在を迎えている。その結果、学力優秀をはばかりような雰囲気すら学校にただよっている。

事実、多くの教師たちは、授業の中で、学力の秀れた子どもより、授業に遅れがちな子どもに目を注いでいる。そして、授業についていけない子どもの割合を、どの程度にとどめておけるかが、教師の腕の見せどころにな



りつつある。このように学力差をあらわにしない学級経営は教育の理想郷であろう。しかし、残念ながら、学年が上がるにつれて、現実問題として、子どもたちの間の学力格差が拡大され始める。そして、子どもたちの知的な学習可能性に開きが存在する以上、教師の力量をもってしても、学力格差を否定しがたくなる。

アメリカなどでは、ここ十年來の傾向として、知的な可能性に恵まれた子どもを集めて「優秀児学級」、Gifted Class を編成する傾向が強まっている。もちろん、そうした反面、学力の遅れぎみな子どもには、専門の教師がついて小人数の授業を展開しているから、アメリカの現状を優秀児学級の観点からのみとらえるのは妥当であるまい。つまり、子どもたちの個性に対応した形の授業形態が定着しており、その中に優秀児学級が含まれているとみなすのが正当な評価であろう。

学級を単位とした授業より、個別化した授業のほうが、当然のことながら、経費がかかる。そうしたことから、小さな政府を求める運動と関連して、教育費の削減が問題となり、アメリカ教育は曲り角を迎えたといわれる。

したがって、これから先、アメリカの教育がどんな方向をたどるのかは不確定の要素が多い。しかし、子どもたちの現実的な学力差に対応して授業の形を編成しているアメリカの教育をイメージに置くと、学級を単位に授業を展開し、学力差をあらわにしない日本の学校に理念追求的な印象を受ける。

そして、やや皮肉な見方をするなら、学校が理想追求的で、子どもたちを集団として扱っている分だけ、学習塾で、子どもの学力に対応した現実的——あまりにも、現実的すぎるように思われるが——な教育が行われているというような印象を受ける。そうした意味で、学校と学習塾とは、現代教育の光と影の関係を形づくっているといえなくもない。

学習塾は日本の特産品

毎年、夏休みへ入ると、子どもを対象とした企画を指導することが多い。ふだん子どもの意識を分析しているので、せめて夏休みぐらい、子どもたちのためになる催し物を運営したいと指導に乗り出すからである。

昭和58年の夏休みは、小中学生80名とともに、



に、ホノルルへ渡った。現地の家庭に短期間、ホームステイさせるプログラムである。実をいうと、この企画は4年目を数えるので、ホノルルにたくさんの知人が増え、教育相談を受ける機会が増加している。

ホノルルには、土曜日に開校される日本語の補習学校があり、在留邦人の子どもの大半は、この学校へ通っている。しかし、補習学校へ行くと、毎日2時間ぐらいやらないと終わらない位の量の宿題が出されるので、子どもたちは、現地の学校の英語についていくのと日本語学校の宿題とに追い回されるらしい。そのため、友だちと遊ばずに、勉強している子どもが少なくない。さしづめ、補習学校は、ホノルル版学習塾といった感じとなる。

そうした事情を反映して、親たちの態度は、英語と日本語とを両方勉強させるのはむずかしい。いずれ、日本へ帰るのだから、現地の学校はほどほどにして、補習学校のほうに力を注ぐ人と、帰国後のことはともかく、現地の学校への適応を優先して考え、いざとなれば補習学校をやめさせるタイプとに二分されていた。そうはいつでも、そこまで割り切るのはよくよくのことで、多くの親たちの心は、両極の間を揺れ動いているようであった。

メインランド(米本土)からホノルルへ来て十年というアメリカ人教師と雑談した折り、補習学校のことが話題となった。せっかく、アメリカへ来ているのだから、アメリカの良さを身につけていけばいい。そして、日本へ帰ったら、その時、日本の良さを学ばばいい。補習学校の宿題に追われると、どちらもマスターできない。それに、ホノルルへ来ている外国人の中で、自国語の勉強に熱中しているのは日本人と韓国人ぐらいのもので、あとの人たちは、自国の文化を大事にしているといっても、自国の学校と同じ内容をホノルルで学ぼうとするような無茶なことはしていないというのが彼の主張であった。

アメリカ人らしい楽観論のように思われる

が、彼の話聞いて、はっとした部分もあった。「日本人と韓国人だけ」という指摘である。というのは、世界の中で、学習塾が社会生活の中に定着しているのは、日本と韓国、そして、台湾などの東南アジアに限られているからである。もっとも、韓国では、夜の11時近くまで、学習塾へ通う子どもが多かったといわれるが、1980年に大統領令によって通塾が禁止され、現在では、塾通いをする子どもの姿はない。そうした意味で、学習塾というスタイルは、日本の学校文化の産み出した特産物という感じがする。

西ドイツの進学状況

ホノルルから帰ってすぐ、ヨーロッパへ旅立った。ある財団が小学校の先生方を対象とした研修旅行を企画し、その団長を依頼されていたからである。

正直なところ、8月はヨーロッパの学校も休みのところが多く、学校視察に適した時期といいがたい。しかし、ふだんの月だと、先生方も出張ににくいので、無理を承知で、ヨーロッパ行きを実施することになった。

出発前、ヨーロッパの教育を見てくるためのいくつかの視点を用意したが、その中のひとつに、「どうしてヨーロッパに学習塾が存在しないのか」があった。

たまたま、西ドイツのヘッセン州で8月の上旬から新学期が始まっていたので、学校の授業を見ると同時に、州と市の関係者から教育事情の説明を受けることができた。

ヘッセン州の小学校は4年制で、その後、ヨーロッパの学校制度らしく、子どもたちは、大学進学を目的とした9年制のギムナジウム、技術者の養成をねらいとした6年制(程度)の実科学校、そして、国民学校へと三分される。もちろん、大学へ進学するためには、ギムナジウムへの入学が前提となる。

なお、ギムナジウムへの選抜は、4年生の前半までの内申と筆記試験の結果とを総合し



て行うとのことであった。4年の終わりに進路が決まってしまう。そして、ギムナジウムへ入れば、大学進学が可能となるばかりか、大学進学率が低いので、専門管理職への到達が約束されている。加えて、小学校の授業は午後1時までで、それから、まったくのフリータイムとなる。となると、学習塾が発生する客観的な状況は熟しているように見える。つまり、学歴間の格差が存在している上に、一流ギムナジウム入学のための入試が控えている。そして、子どもたちは余暇時間を持っているのである。

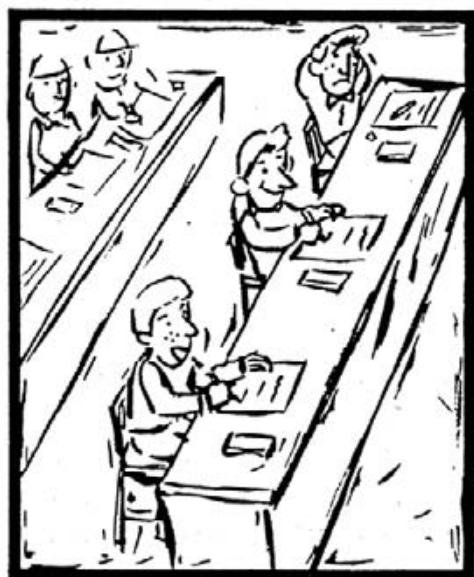
しかし、関係者の話では、無理をしてまで、ギムナジウムへ進学させようとする親はいないとのことであった。そうはいわれても、教育関係者の話だけでは信頼できないので、親たちにもギムナジウム進学熱がないのかどうか尋ねてみた。

「今のところ、ギムナジウムを希望しているが、あとは子どもしたい」、「うちの子はギムナジウムへ向いていないから、実科学校へ進ませるつもり」、「進学まで、あと1年あるの

で、その時になったら考える」などの返事が帰ってきた。その中でも、「子どもしだい」という声が多く、なんとか学力を伸ばして、ギムナジウムへ入れると答えた親は皆無だった。

もっとも、親たちのこうした反応は、ヘッセン州の選抜制度に負う部分が多い。というのは、ギムナジウムへの進学を希望し、入学できなかった子どもは、2年間の促進学級（Förder Stufe）へ入る。そして、この間に、担任が推せんするか、親が希望したりすれば、ギムナジウムで2週間程度の試験授業を受けられる。これは、ギムナジウムで授業を受けつつ、適性を判断してもらう制度である。なお、この試験制度に失敗しても、促進学級の修了生は、全員、希望すれば、ギムナジウムへ入学できる仕組みもとられていた。したがって、形式的に見ると、希望者は全員遅かれ早かれギムナジウムへ入れる制度である。

ヘッセン州のフランクフルト市の場合、ギムナジウム入学者の6割は4年修了後、3割は試験授業を受けて入った子どもで、促進学級修了後の入学者は1割を下回る程度にすぎなかった。もっとも、ギムナジウムへ入学したといっても、ギムナジウムでは、定期試験の



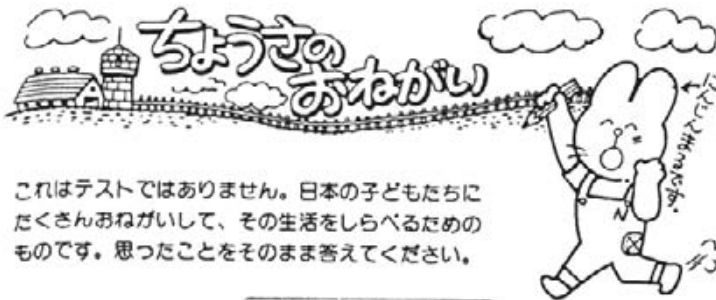
結果によって、実科学校やその他の学校への転学をすすめるので、在籍は卒業を意味していない。転学率の高いギムナジウムでは、学年の3分の1を転学させた事例もあったという。このように、大器晩成型の子どもを含めて、希望者は全員ギムナジウムへの入学を認める。しかし、ついていけなければ、どんどん転学させる制度である。すべての子どもに機会を与えながら、その反面、淘汰の原理も働かせる仕組みでもある。

そうだとすれば、無理をしてギムナジウムへ入れたとしても、苦しむのは、子ども本人であろう。それならば、子どもの適性を尊重しようという気持ちにもなる。それが、塾通いの生じないひとつの背景なのかもしれない。

それにひきかえ、日本の学校は、大学も含めて、入りさえすれば、トコロテン式に卒業できる。それならば、無理をして入れようという気持ちも生まれる。そう考えると、特に大学では淘汰の原理を発揮する必要があるのかもしれない。

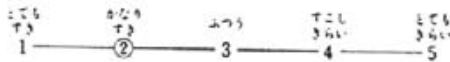
なお、フランクフルト市では外国人労働者が多く、小学生の6割を外人が占め、ドイツ人は4割にすぎなかった。大陸続きの上に、EEC国家の間の移動は簡単なので、生活水準が高く、治安も良いドイツに働きに来る人が多いのが、そうした事態の背景だが、パリやチューリッヒでも、教室の中に、その国の言葉を話せない子どもの姿はまれではなかった。

皮膚の色はむろんのこと、言語も生活習慣もちがっている。そうした多様さの中で生活していると、それぞれの子どもの個性のある存在という実感がわいてくる。しかし、日本の場合、学級の仲間は、言語や文化が基本的に共通している。それだけに、個別の思想が育ちにくい。それが、高校進学率94%というような状況を生み出した遠因なのかもしれない。そう考えてくると、塾通いのなさを望んでも、見通しが暗いという感じがしてきた。



やりかたの練習

あなたはカレーライスが好きですか？

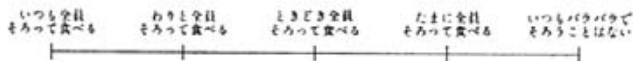


あなたがもしカレーライスを「かなり好き」だと思ったら上のように番号のところを○でかこんでください。

① まず学年などを書いてください。

- ① 学校の名まえ _____ 小学校
- ② 学年…………… (4、5、6) 年 <○でかこむ>
- ③ 男女…………… (1.男 2.女) <○でかこむ>

② あなたのお家では、家族そろって夕食を食べていますか。



③ あなたが夕食のおかず (チャーハン・カツドンなどのようなごはんものでもよい)のうちでいちばん好きなものは何ですか。2つ書いてください。

--	--

④ では、いちばんきらいなおかずは何ですか。2つ書いてください。

--	--

⑤ では、おかず(料理)ではなくて、にんじんとかとり肉のような食品(材料)できらいなものは何ですか。あるもの全部を書いてください。

--	--

↓
何こになりましたか。かぞえてください。 → こ

● 資料1 調査票見本

- ⑥ それでは、そのさらいで食べたくないおかずが、あなたの分だとして家て出されたらどうしますか。



- ⑦ そのさらいなおかずについて、お母さんはどうしていますか。

- | | | |
|----------------------|---|------------------|
| 1. はじめから作らない | } | そのおかずは、あなたの前に出ない |
| 2. あなたの分だけ他のおかずを用意する | | |
| 3. 一口も食べなくてもしからない | } | そのおかずは、あなたの前に出る |
| 4. 半分ぐらい食べればゆるしてくれる | | |
| 5. 一口食べればゆるしてくれる | | |
| 6. 全部食べなければゆるしてくれない | | |

- ⑧ 給食にきれいな食べものが出ることがありますか。

1. ぜんぜん出ない
2. たまに出る
3. とときどき出る
4. しょっちゅう出る

S.Q. 2、3、4に○をつけた人だけ教えてください。

- 〔1〕あなたが、きれいなものを残すと、まわりの子は、あなたのことを、どんなふうと思うと思いますか。

1. 残したからといって、何とも思わない
2. 食べたほうがいいのにと思っている
3. 何でも食べる子とは、ちょっとちがうところがある子だと思っている

S.Q. ⑧の答えとして2、3、4に○をつけた人だけ教えてください。

- 〔2〕きれいなものがでたとき、あなたはどうしていますか。

1. 先生に言われるので、全部食べる
2. 先生に言われるので、できるだけ食べる
3. 先生に言われるが、ぜんぜん食べない
4. 先生は何とも言わないが、全部食べる
5. 先生は何とも言わないが、できるだけ食べる
6. ぜんぜん食べない

9 きらいな食べものを食べないこと(好ききらい)についていろいろな意見があります。あなたはどの意見にさんせいしますか。

1. ほかにいろいろな食べものがあるのだから、きらいなものをムリして食べることはない
2. きらいなものでも、せめて一口ぐらいは食べるようにすべきだ
3. きらいなものでも、ムリをして全部食べるべきだ

10 ではおかあさんの意見はどうだと思えますか。

1. ほかにいろいろな食べものがあるのだから、きらいなものをムリして食べることはない
2. きらいなものでも、せめて一口ぐらいは食べるようにすべきだ
3. きらいなものでも、ムリをして全部食べるべきだ

11 では先生の意見はどうだと思えますか。

1. ほかにいろいろな食べものがあるのだから、きらいなものをムリして食べることはない
2. きらいなものでも、せめて一口ぐらいは食べるようにすべきだ
3. きらいなものでも、ムリをして全部食べるべきだ

12 それでは、きらいな食べもののたくさんある子は、何でも食べる子とくらべてどんな子どもだと思えますか。

	とても思う	わりと思う	あまり 思わない	ぜんぜん 思わない
1. わがまま……………				
2. 体がよわい……………				
3. 家であまやかされている……				
4. 友だちが少ない……………				
5. 神経 <small>しんけい</small> しつ……………				

● 資料1 調査票見本

13 あなたのおかあさんには、きらいな食べものがありますか。

1. きらいな食べものはあるけれども、子どもの前ではムリをして食べる
2. きらいな食べものはあるけれども、なるべく食事に出さないようにしている
3. きらいな食べものは、子どもの前でも食べない
4. きらいな食べものなんかぜんぜんない（何でも食べる）
5. きらいな食べものがあるかどうか知らない

14 それでは、あなたの担任の先生は給食の時にどうしていますか。

1. きらいな食べものがた時は、子どもの前ではムリをして食べている
2. きらいな食べものがた時は、自分の分を少なくしている
3. きらいな食べものは、残して食べない
4. きらいな食べものなんかぜんぜんない（何でも食べる）
5. きらいな食べものがあるかどうか知らない

15 あなたは、つぎのようなことがどのくらいできると思いますか。

- | | ぜんぜん平気で食べられる | わりと平気で食べられる | たぶん食べられない | ぜんぜん食べられない |
|---------------------------|-------------------------|-------------|-----------|------------|
| 1. 生たまごをむ | ----- ----- ----- ----- | | | |
| 2. ぷつぷつしたとり肉のかわを食べる | ----- ----- ----- ----- | | | |
| 3. ししゃもやめざしの頭やしっぽを食べる | ----- ----- ----- ----- | | | |
| 4. 小さな骨の多い魚（の骨をとりながら）を食べる | ----- ----- ----- ----- | | | |
| 5. かわをむいていないリンゴをかじる | ----- ----- ----- ----- | | | |
| 6. 今までに食べたことのないものでも平気で食べる | ----- ----- ----- ----- | | | |

16 あなたは次のようなことがどのくらいありますか。

- | | | | | | |
|----|---|------------|------------|--------------|---------------|
| 1. | 昼にいやなことがあると、
夜はなかなか寝つかれない | とても
そうだ | 少しは
そうだ | あまり
そうでない | ぜんぜん
そうでない |
| 2. | ちょっとした物音で
目をさます | とても
そうだ | 少しは
そうだ | あまり
そうでない | ぜんぜん
そうでない |
| 3. | 自分のへやなどはきちんと
とかなづいていないとお
ちつかない | とても
そうだ | 少しは
そうだ | あまり
そうでない | ぜんぜん
そうでない |
| 4. | 食事の前にはきれいに手
をあらわないと気持ちが
悪い | とても
そうだ | 少しは
そうだ | あまり
そうでない | ぜんぜん
そうでない |
| 5. | あした何を持っていった
らよいかを、友だちにた
びたびたしかめないと心
配だ | とても
そうだ | 少しは
そうだ | あまり
そうでない | ぜんぜん
そうでない |

17 あなた自身のことについてお聞きます。

- | | | | | | | |
|----|--|----------------|----------------|---------------|---------------|----------------|
| 1. | あなたは同じ年れいの子
どもとくらべてたくさん
食べるほうですか | とてもたくさん
食べる | わりとたくさん
食べる | ふつう
ぐらい | わりと
少 | とても
少 |
| 2. | あなたはおなかをこわし
やすいですか | とても
そう | わりと
そう | どちらでも
ない | あまり
そうではない | ぜんぜん
そうではない |
| 3. | あなたはほかの友だちと
くらべて好きさらいが多
いほうですか | とても
そう | わりと
そう | どちらとも
言えない | あまり
そうではない | ぜんぜん
そうではない |
| 4. | 好きな教科はいっしょう
けんめい勉強するがきら
いな教科はあまり勉強し
ないほうですか | とても
そう | わりと
そう | どちらとも
言えない | あまり
そうではない | ぜんぜん
そうではない |
| 5. | いそがしくてたいへんな
係や委員にはなるべく
ならないほうですか | とても
そう | わりと
そう | どちらとも
言えない | あまり
そうではない | ぜんぜん
そうではない |
| 6. | 何でもはっきりと自分の
意見を言うほうですか | とても
そう | わりと
そう | どちらとも
言えない | あまり
そうではない | ぜんぜん
そうではない |
| 7. | なかのよい友だちとばか
り遊ぶほうですか | とても
そう | わりと
そう | どちらとも
言えない | あまり
そうではない | ぜんぜん
そうではない |

● 資料1 調査票見本

	とても そう	わりと そう	どちらとも 言えない	あまり そうではない	ぜんぜん そうではない
8. 夕食は楽しいですか……………	-----				
	とても そう	わりと そう	どちらとも 言えない	あまり そうではない	ぜんぜん そうではない
9. 給食は楽しいですか……………	-----				
おとうさんやおかあさん	とても そう	わりと そう	どちらとも 言えない	あまり そうではない	ぜんぜん そうではない
10. はしつけのきびしいほう…… ですか	-----				

18 あなたのおかあさんのお仕事（職業）をおしえてください。

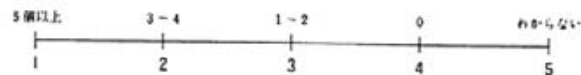
1. 朝から夕方まで外で働いている
2. 1日のうち何時間か外で働いている
3. 自分の家の仕事（お店など）を手伝っている
4. お家で内職をしている
5. 別に仕事はしていない

これでおわりです。どうもありがとうございました。

調査のお願い(親用調査票)

※お子さんの食事の好きさについてお聞きします。

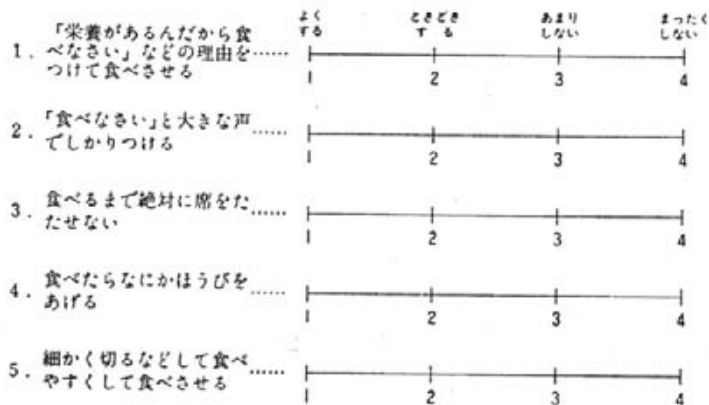
- ① お子さんは、きらいなものがどのくらいありますか。
(ぶた肉・ニンジンなど食品の数で答えてください)



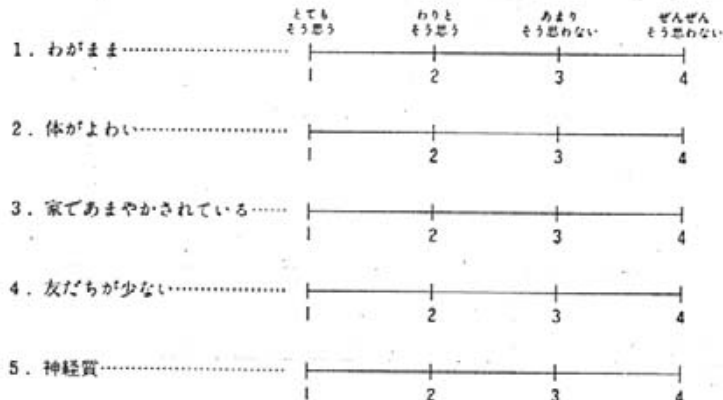
- ② あなたは、お子さんの偏食についてどのように思いますか。

1. 別にあってぜんぜんかまわないと思う
2. よいとは思わないが、少しぐらいならかまわないと思う
3. 好きさらいなく、なんでも食べられたほうがよいと思う

- ③ それでは、実際にお子さんの偏食をなおすために次のようなことをしていますか。それぞれ、あてはまるところに○をつけてください。



- ④ きらいな食べ物(偏食)のたくさんある子は、何でも食べる子とくらべて、どんな子だと思いますか。



これで終わりです。ご協力ありがとうございました。

● 資料2 学年・性別集計表

単位：サンプル数以外はパーセント

質問項目	学年	性別	全体	性別			学年		
				男子	女子	4年	5年	6年	
1 サンプル数	学年	4年	382	220	162				
		5年	388	220	168				
		6年	137	78	59				
	性別	男子	518						
		女子	389						
2 家族そろって食べるか	1. いつも全員そろって食べる		19.7	20.2	19.1	19.5	20.0	18.8	
	2. わりと全員そろって食べる		36.3	38.3	33.4	32.6	37.9	42.0	
	3. ととき全員そろって食べる		23.9	21.6	26.8	24.9	22.9	24.1	
	4. たまに全員そろって食べる		17.8	17.3	18.6	20.9	16.6	12.8	
	5. いつもバラバラでそろうことはない		2.3	2.6	2.1	2.1	2.6	2.3	
5 嫌いなお食品の数	1. 0こ		23.0	26.7	17.8	23.6	21.4	25.5	
	2. 1こ		17.2	17.3	17.0	16.5	18.0	16.1	
	3. 2こ		21.0	23.5	17.8	21.7	20.6	21.2	
	4. 3こ		12.7	10.8	15.3	12.0	13.9	11.7	
	5. 4こ		11.4	9.8	13.5	10.2	10.8	16.1	
	6. 5こ		4.3	3.3	5.6	3.7	5.4	2.9	
	7. 6こ		3.6	3.7	3.6	6.0	2.3	0.7	
	8. 7こ		2.3	1.5	3.3	2.9	1.5	2.9	
	9. 8こ		1.1	1.0	1.3	0.5	1.5	1.5	
	10. 9こ		0.8	0.4	1.3	1.0	0.8	0	
	11. 10こ以上		2.6	2.0	3.5	1.9	3.8	1.4	
6 嫌いなおかずが出たら	1. 一口も食べない		18.2	20.6	15.2	19.9	17.6	15.6	
	2. 一口だけは食べる		18.6	14.1	24.3	18.5	19.6	16.4	
	3. 半分ぐらい食べる		18.8	16.6	21.6	18.0	18.5	21.1	
	4. ムリして食べるが少し残す		20.5	21.2	19.7	19.9	20.7	22.7	
	5. 全部食べる		23.9	27.5	19.2	23.7	23.6	24.2	
7 嫌いなおかずについてお母さんはどうするか	1. はじめから作らない		8.2	9.4	6.7	8.2	6.4	11.9	
	2. あなたの分だけ他のおかずを用意する		10.1	11.4	8.4	9.4	12.1	6.8	
	3. 一口も食べなくてもしからない		17.1	15.6	19.2	17.9	18.5	11.9	
	4. 半分ぐらい食べればゆるしてくれる		38.8	35.4	42.7	37.9	38.7	40.6	
	5. 一口食べればゆるしてくれる		9.7	7.6	12.5	12.1	7.3	10.2	
	6. 全部食べなければゆるしてくれない		16.1	20.6	10.5	14.5	17.0	18.6	
8 たまたま嫌いなお食品が出たときあなたはどうするか	1. ぜんぜんでない		18.9	22.6	14.0	20.4	19.2	13.4	
	2. たまにでる		43.2	42.9	43.7	45.7	37.4	53.1	
	3. とときでる		28.0	24.4	32.7	27.2	30.5	23.1	
	4. しょっちゅうでる		9.9	10.1	9.6	6.7	12.9	10.4	
	1. 残したからといって何とも思わない		50.8	54.3	47.0	45.8	52.9	57.6	
	2. 食べたほうがいいのにと思っている		40.8	37.6	44.6	46.2	39.0	33.0	
	3. 何でも食べる子とは、ちよつとちがう子だと思っている		8.4	8.1	8.4	8.0	8.1	9.4	
	1. 先生に言われるので全部食べる		10.6	11.5	9.1	11.0	8.9	11.2	
	2. 先生に言われるのでできるだけ食べる		18.4	19.5	16.7	18.8	17.8	18.1	
3. 先生に言われるがぜんぜん食べない		3.1	3.3	2.8	2.7	3.0	4.3		
4. 先生は何とも言わないが全部食べる		20.2	20.6	19.9	18.8	22.1	19.0		
5. 先生は何とも言わないができるだけ食べる		37.0	31.1	44.9	38.1	36.0	39.6		
6. ぜんぜん食べない		10.7	14.0	6.6	10.6	12.2	7.8		
9 のに好き嫌いはたいてい	1. ムリして食べることはない		11.7	15.6	6.5	11.6	12.6	8.3	
	2. 一口ぐらいは食べるべき		65.5	56.3	77.6	64.5	64.1	72.2	
	3. ムリしても全部食べるべき		22.8	28.1	15.9	23.9	23.3	19.5	
10 のお母さんへ	1. ムリして食べることはない		8.0	9.6	6.0	6.5	9.1	8.4	
	2. 一口ぐらいは食べるべき		65.4	60.1	72.1	68.2	62.9	64.9	
	3. ムリしても全部食べるべき		26.6	30.3	21.9	25.3	28.0	26.7	

● 資料2 学年・性別集計表

セント
別
年
18.8
42.0
24.1
12.8
2.3
25.5
16.1
21.2
11.7
16.1
2.9
0.7
2.9
1.5
0
1.4
15.6
16.4
21.1
22.7
24.2
11.9
6.8
11.9
40.6
10.2
18.6
13.4
53.1
23.1
10.4
57.6
33.0
9.4
11.2
18.1
4.3
19.0
39.6
7.8
8.3
72.2
19.5
8.4
34.9
26.7

質問項目	全体	性別		学年別				
		男子	女子	4年	5年	6年		
11 見先に好き嫌いや意てい	1. ムリして食べることはない	7.6	10.1	4.2	6.5	10.3	3.1	
	2. 一口ぐらいは食べるべき	60.0	54.0	67.8	61.8	57.2	63.3	
	3. ムリしても全部食べるべき	32.4	35.9	28.0	31.7	32.5	33.6	
12 嫌いな食べ物たくさんある子はどんな子か	わがまま	1. とても思う	29.6	34.5	23.4	30.5	29.3	28.5
		2. わりと思う	39.4	36.9	42.6	37.4	39.2	44.6
		3. あまり思わない	24.2	20.6	28.7	23.6	25.5	22.3
		4. ぜんぜん思わない	6.8	8.0	5.3	8.5	6.0	4.6
	体がよわい	1. とても思う	24.8	25.0	24.6	26.0	21.1	31.8
		2. わりと思う	28.6	26.4	31.2	22.2	33.4	33.4
		3. あまり思わない	28.7	28.3	29.4	29.6	28.2	26.5
		4. ぜんぜん思わない	17.9	20.3	14.8	22.2	17.3	8.3
	家で甘やかされてる	1. とても思う	29.3	30.5	27.5	28.5	29.3	29.8
		2. わりと思う	28.9	25.6	33.4	29.7	24.4	39.6
		3. あまり思わない	27.3	27.3	27.2	25.2	30.0	26.0
		4. ぜんぜん思わない	14.5	16.6	11.9	16.6	16.3	4.6
友達が少ない	1. とても思う	10.1	11.0	8.8	12.5	8.9	6.1	
	2. わりと思う	18.3	18.8	17.8	16.9	19.8	19.1	
	3. あまり思わない	38.2	35.0	42.0	37.9	35.8	44.3	
	4. ぜんぜん思わない	33.4	35.2	31.4	32.7	35.5	30.5	
神経質	1. とても思う	14.4	16.8	11.3	15.3	14.1	13.1	
	2. わりと思う	23.2	23.2	22.9	23.4	22.2	24.6	
	3. あまり思わない	35.4	31.5	40.7	32.2	36.4	41.5	
	4. ぜんぜん思わない	27.0	28.5	25.1	29.1	27.3	20.8	
13 食べ物は嫌いなものはお母さんに	1. あるけれども、子どもの前ではムリして食べる	11.4	12.3	10.2	10.9	12.4	9.8	
	2. あるけれども、食事に出来ないようにしている	6.5	6.3	6.8	5.2	8.4	5.3	
	3. あるけれども、子どもの前でも食べない	9.6	9.9	9.2	10.9	9.2	7.6	
	4. ぜんぜんない(何でも食べる)	38.9	36.5	42.0	42.6	37.5	32.6	
	5. あるかどうか知らない	33.6	35.0	31.8	30.4	32.5	44.7	
14 先生は給食の時嫌いな食べ物は先生は給	1. 子どもの前ではムリをして食べている	11.8	12.8	10.4	8.3	15.2	10.5	
	2. 自分の分を少なくしている	4.9	4.9	4.9	5.9	4.6	3.0	
	3. 残して食べない	11.6	11.1	12.2	12.9	12.2	6.8	
	4. 嫌いな物はぜんぜんない(何でも食べる)	23.6	20.6	27.3	30.1	18.7	19.5	
	5. あるかどうか知らない	48.1	50.6	45.2	42.8	49.3	60.2	
15 生きたまむしを食べるとのくらいで食べるか	1. ぜんぜん平気で食べられる	21.3	27.8	12.7	20.2	22.2	20.9	
	2. わりと平気で食べられる	24.4	25.5	23.1	19.7	27.7	29.8	
	3. たぶん食べられない	26.8	20.4	35.1	29.3	24.0	26.9	
	4. ぜんぜん食べられない	27.5	26.3	29.1	30.8	26.1	22.4	
15 とり肉の皮を食べるとのくらいで食べるか	1. ぜんぜん平気で食べられる	34.9	43.4	23.5	35.9	36.7	26.9	
	2. わりと平気で食べられる	27.6	27.3	27.9	24.7	28.1	34.3	
	3. たぶん食べられない	24.6	19.4	31.6	24.1	23.3	29.1	
	4. ぜんぜん食べられない	12.9	9.9	17.0	15.3	11.9	9.7	
15 小魚をまるごと食べるか	1. ぜんぜん平気で食べられる	34.6	44.6	21.2	36.4	33.3	33.6	
	2. わりと平気で食べられる	25.3	24.2	26.7	21.2	27.8	29.0	
	3. たぶん食べられない	24.0	16.9	33.5	25.2	22.2	25.2	
	4. ぜんぜん食べられない	16.1	14.3	18.6	17.2	16.7	12.2	
15 骨の多い魚を食べるか	1. ぜんぜん平気で食べられる	35.3	42.9	24.9	38.8	31.6	34.8	
	2. わりと平気で食べられる	39.3	35.8	44.3	36.1	41.9	42.5	
	3. たぶん食べられない	19.5	15.8	24.7	18.8	20.4	18.9	
	4. ぜんぜん食べられない	5.9	5.5	6.1	6.3	6.1	3.8	

● 資料2 学年・性別集計表

質問項目	全体	性別		学年別				
		男子	女子	4年	5年	6年		
15 どのくらいいできるか	皮をむいて ないリンゴ	1. ぜんぜん平気で食べられる	72.1	76.6	66.1	73.6	70.4	73.4
		2. わりと平気で食べられる	22.1	17.0	28.7	19.9	23.5	23.5
		3. たぶん食べられない	3.6	3.0	4.4	4.9	2.9	2.3
		4. ぜんぜん食べられない	2.2	3.4	0.8	1.6	3.2	0.8
	食べたこと のないもの	1. ぜんぜん平気で食べられる	19.8	26.2	11.5	22.3	19.7	12.8
		2. わりと平気で食べられる	42.4	41.0	44.2	37.0	43.7	54.1
		3. たぶん食べられない	31.2	25.4	38.8	34.3	29.5	27.1
		4. ぜんぜん食べられない	6.6	7.4	5.5	6.4	7.1	6.0
16 どのくらいあ るか	つとかな いかな かな あ	1. とてもそうだ	13.3	12.6	14.0	14.5	13.3	9.8
		2. 少しそうだ	25.6	19.7	33.3	21.7	24.3	39.1
		3. あまりそうでない	26.9	25.6	28.7	27.1	26.4	27.8
		4. ぜんぜんそうでない	34.2	42.1	24.0	36.7	36.0	23.3
	たよつと をさす 目し	1. とてもそうだ	10.1	10.7	9.4	8.9	11.2	10.6
		2. 少しそうだ	15.3	14.8	16.1	14.1	17.0	14.4
		3. あまりそうでない	27.5	23.7	32.2	22.4	28.7	37.1
		4. ぜんぜんそうでない	47.1	50.8	42.3	54.6	43.1	37.9
ちいへ やがた たない かた た	1. とてもそうだ	20.0	18.7	21.5	19.7	19.0	20.8	
	2. 少しそうだ	26.6	21.7	32.9	21.6	28.6	36.2	
	3. あまりそうでない	28.1	26.5	30.4	27.0	29.1	29.2	
	4. ぜんぜんそうでない	25.3	33.1	15.2	31.7	23.3	13.8	
食事前 手であ い あ	1. とてもそうだ	33.0	28.1	39.1	28.1	32.9	45.8	
	2. 少しそうだ	34.4	29.7	40.7	32.2	34.7	41.2	
	3. あまりそうでない	18.4	21.2	14.8	20.8	19.2	8.4	
	4. ぜんぜんそうでない	14.2	21.0	5.4	18.9	13.2	4.6	
持たし たし かめ	1. とてもそうだ	11.8	11.6	12.2	13.7	10.5	10.0	
	2. 少しそうだ	28.7	27.1	30.8	25.9	29.1	34.7	
	3. あまりそうでない	29.2	24.3	35.5	28.6	29.1	31.5	
	4. ぜんぜんそうでない	30.3	37.0	21.5	31.8	31.3	23.8	
17 あな た 自 身 の こ と	た く さ ん 食 う か	1. とてもたくさん食べる	15.5	22.9	5.9	19.1	13.4	11.9
		2. わりとたくさん食べる	24.6	28.4	19.5	20.4	27.6	27.4
		3. ふつうくらい	43.1	36.2	52.3	41.4	42.2	49.6
		4. わりと少食	12.7	8.8	17.7	13.5	13.4	8.9
		5. とても少食	4.1	3.7	4.6	5.6	3.4	2.2
お な か を こ い う	1. とてもそう	7.1	7.3	6.8	7.2	7.8	5.2	
	2. わりとそう	13.8	12.5	15.4	11.5	14.7	15.7	
	3. どちらでもない	18.4	17.4	19.6	15.5	19.0	24.6	
	4. あまりそうではない	30.5	27.7	34.2	29.3	30.9	33.6	
	5. ぜんぜんそうではない	30.2	35.1	24.0	36.5	27.6	20.9	
好 き 嫌 い が 強 い ほ う は	1. とてもそう	9.3	10.8	7.6	12.8	7.4	3.7	
	2. わりとそう	19.6	17.5	22.1	17.7	20.1	23.9	
	3. どちらでもない	23.1	21.5	25.3	23.6	23.0	23.1	
	4. あまりそうではない	26.6	24.5	29.1	21.7	29.1	32.1	
	5. ぜんぜんそうではない	21.4	25.7	15.9	24.2	20.4	17.2	
強 い ほ う は	1. とてもそう	15.3	20.6	8.6	18.3	14.8	8.2	
	2. わりとそう	20.3	20.2	20.0	23.1	15.1	26.1	
	3. どちらとも言えない	30.3	27.0	34.8	22.1	35.5	38.1	
	4. あまりそうではない	22.1	19.0	26.2	22.3	23.0	20.1	
	5. ぜんぜんそうではない	12.0	13.2	10.4	14.2	11.6	7.5	

1.4
1.5
2.3
0.8
1.8
1.1
1.1
1.0
1.8
1.1
1.8
1.3
1.6
1.4
1.1
1.9
1.8
1.2
1.2
1.8
1.8
1.2
1.4
1.6
1.0
1.7
1.5
1.8
1.9
1.4
1.6
1.9
1.7
1.9
1.1
1.1
1.2
1.2
1.1
1.1
1.1
1.5

質問項目	全 体	性 別		学 年 別				
		男 子	女 子	4 年	5 年	6 年		
17 あなただ自身の生活のこゝと	「らやたな委員へんにはうはな係」	1. とてもそう	16.8	20.6	11.7	25.1	11.5	9.1
		2. わりとそう	21.6	24.1	18.2	23.5	18.9	22.0
		3. どちらとも言えない	24.9	22.4	28.5	18.6	28.5	31.7
		4. あまりそうではない	19.3	14.1	26.0	13.7	24.3	22.0
		5. ぜんぜんそうではない	17.4	18.8	15.6	19.1	16.8	15.2
	「言分はうのほきり見を」	1. とてもそう	11.1	14.5	6.8	11.7	12.0	7.0
		2. わりとそう	18.6	18.9	18.1	20.1	16.3	20.2
		3. どちらとも言えない	27.5	30.1	23.8	22.2	30.9	31.8
		4. あまりそうではない	31.1	26.0	37.9	30.8	30.4	34.8
		5. ぜんぜんそうではない	11.7	10.5	13.4	15.2	10.4	6.2
	「りだ仲遊ぶとよはうか友」	1. とてもそう	22.6	26.6	17.4	25.7	21.8	16.8
		2. わりとそう	32.4	31.8	33.0	32.7	30.5	35.9
		3. どちらとも言えない	23.7	23.2	24.5	20.3	25.7	29.0
		4. あまりそうではない	13.9	10.0	18.8	13.2	13.8	14.5
		5. ぜんぜんそうではない	7.4	8.4	6.3	8.1	8.2	3.8
「し夕食は楽いか」	1. とてもそう	40.8	42.3	38.8	46.4	40.2	28.5	
	2. わりとそう	31.1	29.3	33.6	25.7	32.3	43.0	
	3. どちらとも言えない	18.0	18.2	17.7	14.4	19.8	22.3	
	4. あまりそうではない	7.6	6.8	8.6	11.1	5.3	3.1	
	5. ぜんぜんそうではない	2.5	3.4	1.3	2.4	2.4	3.1	
「給食は楽しい」	1. とてもそう	44.9	49.0	39.4	50.9	43.0	34.9	
	2. わりとそう	28.9	26.5	32.1	25.0	30.3	35.6	
	3. どちらとも言えない	15.8	14.9	17.1	12.1	17.2	22.5	
	4. あまりそうではない	6.3	4.8	8.2	7.1	5.8	3.9	
	5. ぜんぜんそうではない	4.1	4.8	3.2	4.9	3.7	3.1	
「は父母のしつけ」	1. とてもそう	23.3	26.1	19.4	25.3	19.1	29.2	
	2. わりとそう	28.8	28.8	28.8	28.3	28.7	30.8	
	3. どちらとも言えない	25.6	25.7	25.6	21.6	29.0	28.5	
	4. あまりそうではない	14.1	10.8	18.4	15.7	13.6	9.2	
	5. ぜんぜんそうではない	8.2	8.6	7.8	9.1	9.6	2.3	
18 「仕事(職業)のおかあさんの」	1. フルタイム	27.2	28.3	25.9	25.8	26.4	33.1	
	2. パート	18.5	18.5	18.5	19.7	17.9	17.3	
	3. 家業手伝い	14.5	15.0	13.7	11.8	14.9	20.5	
	4. 内 職	14.1	13.9	14.2	11.5	17.9	11.0	
	5. 専業主婦	25.7	24.3	27.7	31.2	22.9	18.1	